

悪女役らしく離婚を迫ろうとしたのに、
夫の反応がおかしい

登場人物紹介

マドレーヌ

ジェラートの
曾祖母で聖女。
塞ぎ込んでいたが、
シャルロットと出会う
明るさを取り戻した。

シヨクラ

シャルロットが前世で読んだ
小説のヒロイン。新たな聖女。

クラフティ

シャルロットの弟で
伯爵令息。
姉が好きすぎて
周りが見えなくなる
ことがある。

ジェラート

シャルロットの夫で王太子。
シャルロットを見初めて
結婚したが、なぜか冷たく
接していて……？

シャルロット

王太子妃。
自分が小説の悪女役に
転生していることに気付き、
断罪回避のために
離婚を決意する。

目次

悪女役らしく離婚を迫ろうとしたのに、
夫の反応がおかしい

7

番外編 可愛いカカオ

263

悪女役らしく離婚を迫ろうとしたのに、
夫の反応がおかしい

第一章 離婚が駄目なら

王太子宮の庭園には春の花ラナンキュラスが、バラに勝るとも劣らない可憐な花びらを幾重にも重ねながら咲き誇っていた。

涼やかな風は、植物の目覚めを促すように吹き抜け、これからさまざまな花が咲き乱れる季節がやってくる。

そう——、季節はまだ早春。

屋外でお茶会を楽しむには、少し早い時期。

しかし、そんな気温にもかかわらず庭園のガゼボ（東屋^{あずまや}）では、二人きりのお茶会が開かれていた。ガゼボの屋根が日陰を作っており、なおさら肌寒い。

王太子妃であるシャルロットは、お茶を一口飲んだ。食道から胃にかけて温かさを感じ、ほっとしながら息を吐く。

それからさり気なく、ホワイトブロンドの髪の毛を首に寄せた。なぜなら、首から肩まで露出したデザインのドレスが寒いから。

この季節に不釣り合いなドレスだということは重々承知しているが、これは仕方のないことだっ

たりする。

向かい側に座っている夫は、こういったデザインのドレスが好みらしい。それを知ってからこの五年間で、肩を露出したドレスばかり仕立ててしまった。シャルロットの衣装部屋には、露出度の低いドレスなど存在しない。

シャルロットはルビーのような赤い瞳を、夫であり王太子のジェラート・ブリオツシュに向けた。

彼は美しい銀髪の下を胸の上辺りまで伸ばしている。人前へ出る際は後ろで束ねているが、普段はこうして無造作におろしている。

険しい顔つきも相まって『狼^{おおかみ}のようだ』と貴族から恐れられている彼だが、髪を束ねていないとさらに狼のような雰囲気が強調される。

貴族令嬢がこのような姿の彼を見たら、泣き出してしまうかもしれない。現にシャルロットの侍女たちも、ジェラートにはあまり近づきたくないようだ。けれどシャルロット自身が怖いと思ったことは、今まで一度もない。

綺麗な銀髪に触れてみたいと願うほどには好意的だが、その願いはこの五年間で一度も果たされなかった。

彼に触れるどころか、彼の金色の瞳はシャルロットを見てくれないのだから。

冷え切った夫婦関係ではあるが、彼が宮殿にいる際は義務として、こうしてお茶の時間が設けられる。

会話もなく苦痛な時間だが、これもすぐに終わる。彼はいつも、お茶を一杯だけ飲んだらすぐに



いなくなってしまうから。

まだ肌寒いこの時期の言い訳は「そなたも寒いだろう。そろそろ戻ろうか」。それを言うためにわざわざ外でお茶会を開いているのだ。

ちなみに夏の言い訳は「そなたも暑いだろう」。冬は、冷たいお茶を出させて以下省略。

今日も早々にお茶を飲み終えたジェラートは、言い慣れた呪文のように「そなたも寒いだろう。そろそろ戻ろうか」と呟く。

それに「はい」とうなずけばお茶会はお開きになるが、今日のシャルロットは違った。

「お待ちくださいませ、ジェラート様」

「……なんだ？」

今まで引き留められたことがないジェラートは、整った眉をひそめてシャルロットを見つめ……はしない。彼はいつだって、シャルロットを直視しない。微妙に視線をそらす。

愛のない政略結婚だということは、シャルロットも理解していたが、見たくもないほど嫌われているのには耐えられなかった。

これまで何度か離婚を申し出てはみたが、ことごとく却下されている。

しかし、今日こそこの状況を打開してみせると、強い意志を持ってお茶会に挑んだ。視線の合わない夫を、しっかりと見つめる。

「私、実家に帰らせていただきます！」

「……………」

少し離れた場で待機している侍女たちにも、はつきりと聞こえるくらい大きな声でそう宣言すると、ジェラートは固まったように動かなくなった。

透き通るように美しい銀髪だけが風に揺れ、琥珀こほろのような金色の瞳はやはり、シャルロットを映してはいない。

まるで人形のようにだけれど、人形よりもよほど美しい。こんな状況にもかかわらず、思わず見惚みぼれてしまう。

「……離婚はしない。何度も言わせるな」

しばらく沈黙が続いてから返ってきたのは、いつもどおりの言葉だった。

かれこれ二年ほど同じようなやり取りを繰り返しているの、それは想定済み。

けれど、今日は離婚を切り出したわけではない。

「離婚はいたしません。その代わりに、実家へ帰らせてください」

シャルロットの実家は、大陸の北方で広大な領地を有するハット伯爵家。

「別居を望んでいるのか？　しかし王族として『夫婦の義務』は果たさねばならない。公務もある」

「義務は果たしますわ。ただそれ以外の時間は、私の好きなようにしたいのです」

「夫婦の義務は朝食から始まる。実家に帰っては、果たせないだろう」

王家には『夫婦の義務』というものが存在する。

それは『朝食の席をともにする』から始まり、『日中に一度はお茶の場を設ける』、『晩餐ばんさんの席を

ともにする』、ほかに『夜会へは一人で出席する』や、『週に一度は寝室をともにする』というものもある。

夫婦としてはごく普通のことであるが、公務にかまけて夫婦関係がおろそかにならないようにと作られた、王家の人間が守らなければならない義務だ。

シャルロットとジェラートもこの五年間、しっかりと義務を果たしてきた。ただ、それらをこなしたからといって、夫婦仲が深まるようなことはなかった。

「実家と言いましても、領地へ戻るわけではありませんわ。王都の邸宅で生活し、そちらから宮殿に通わせていただきたいのです。朝食の時間には間に合わせませし、晚餐が終わってから帰ります。週に一度は宮殿に泊まりますので、どうかお許しくださいませ」

食い入るように夫を見つめると、彼は庭園を眺めながら小さくため息をつく。

「勝手にしろ」

それだけ返すと、ジェラートは足早に宮殿へと戻っていった。

夫が見えなくなつてから、緊張の糸が途切れたように息を吐いた。

それから侍女たちに向けて、両腕で大きく○のサインを出す。

すると侍女五名は「きゃー！」と歓声を上げながら、シャルロットの元へと駆け寄ってきた。

「おめでとございます、王太子妃様！　ついに離婚ですか？」

「いいえ。今回は別居を申し出てみたの。ここからじわじわと、距離を空けていくつもりよ」

「一步前進ですね！ これまで粘ってきた甲斐がございましたわ！」

侍女たちも、王太子夫婦が冷え切った関係であることは重々承知している。

シャルロットは、十五歳の若さで、八歳も離れた王太子と結婚した。

それは、王太子の意思によるもの。

彼女を気に入ったのならば溺愛するのかもしれない。夫婦生活は初めから冷えたものだった。

ろくに視線も合わせず、会話もない。この五年間で、一度たりとも子供をつくろうとしなかった。女嫌いな王太子は、『仮初めの夫婦関係に文句を言われないよう、従順な若い娘を娶った』というのが、貴族の間での共通認識。

しかしこの五年間を近くで見えてきた侍女たちは、シャルロットが従順な娘ではないことを知っている。

夫婦関係を改善するため、義務や公務を完璧にこなし、王太子の理想に近づこうと努力もしてきた。

初めの三年間はそうして頑張ったが、夫は一向に心を開かない。次第にシャルロットは、離婚を口にするようになっていた。

この国では王族の離婚もさほど、珍しくはない。『合わない相手と添い遂げる必要はない』という考えの、さっぱりとした国民性でもある。

それにもかかわらずジェラートは、「離婚はしない」と拒否し続ける。

侍女たちもシャルロットが不憫でならなかったが、今日はついに解決の糸口が見つかったと喜び

合った。

「そうと決まれば、善は急げよ。引っ越しの準備をしてもらえるかしら」

「はい！ 王太子妃様！」

部屋へと戻り、引っ越しの準備に指示を出しつつ、シャルロットは物思いにふけていた。

（まさか私が、転生していたとはね……）

誰しも一つくらいは欠点があるもので、努力家のシャルロットにも『寝相が悪い』という欠点がある。

幼い頃は、ベッドに柵を取り付けなければ寝ている間に床に落ちてしまうほど。成長とともに少しはマシになったが、それでも枕に足を向けた格好で目覚めるなんてことも未だにあつたりする。

今朝はその欠点が炸裂し、久しぶりにベッドから落ちてしまった。

その際、運悪く頭を打ちつけたシャルロットは、唐突に自分の前世を思い出したのだった。

その記憶によると前世は日本人で、二十代の会社員だった。仕事のストレス発散にと、恋愛小説を読み漁っていた。彼女が何百冊と読んだ中の一冊が、この世界に酷似していると思いついた。

しかもシャルロットは、ヒロインではない。ヒロインである聖女と、夫のジェラートとの恋路を邪魔する『悪女役』だったのだ。

この世界には、神に選ばれた聖女が存在する。聖女には土地を浄化し魔獣を減らす力があるので、その土地の人々は安心して暮らせる。聖女は大陸ごとに一人ずつ選ばれ、その聖女の力が弱まり役

目を終える頃になるとまた、新しい聖女が現れる。

この大陸では、ブリオツシュ王国の王太子が代々、新たな聖女を探し出す役目を担っていた。つまり、シャルロットの夫であるジェラートが、聖女を見つける役であり、この小説のヒーローだった。

小説の始まりは、今から一年後。

何年もかけて新たな聖女を探していたジェラートがついに、ヒロインである聖女を見つけ出すところから始まる。

王妃の提案により、聖女をジェラートの側妃として迎え入れることになり、二人は婚約する。

しかし結婚前にもかかわらずジェラートは、聖女とばかり夫婦の義務をおこなうようになり、シャルロットは嫉妬で精神を病んでいく。

シャルロットは、いかに自分が聖女よりも優れているかを誇示しようとしたり、ジェラートに嫉妬させようと男遊びを始めるようになる。

(私がそんな悪女になるなんて、信じられないわ……)

シャルロットのおこないは全て、ジェラートの目を自分に向けさせるためのものだったが、それを利用する者が現れる。

ある日、王太子と聖女が寝込みを襲われて暗殺されかけた。その時の暗殺者が持っていた短剣に、シャルロットの実家であるハット家の紋章がついていた。

結局その事件は王太子の敵対派閥による陰謀だったと後にわかるのだが、そうとは知らないジェ

ラートはハット家の全員を処刑する。その中には、首謀者と思われていたシャルロットも含まれており、断罪されてしまうのだ。

そこまで思い返したシャルロットは、ぶるつと身震いする。

「王太子妃様、お寒いですか？」

「ううん、大丈夫よ」

お茶を一口飲んで「ほう」と息をついた。

屋外とは違い、宮殿内は温室のような暖かさ。今のは『断罪』への恐怖心からくる身震いだ。

そう。このままいくとシャルロットには、断罪される未来が待っている。それはなんとしても阻止しなければならぬ。

しかしジェラートは決して離婚は認めないし、小説の中でも離婚していなかった。

ならばと今朝は、必死に考えて『別居』しようと思った。

夫と距離を空けることで、夫婦ではなく他人という認識を植え付けていこうと考えたのだ。疎遠になつていけば、離婚しやすくなるかもしれない。

意外にもジェラートはすぐに了承したので、これからさらなる離婚への計画を立てる予定でいる。そう考えながら部屋を見回してみると、侍女たちがいそいそと引っ越しの準備を整えている。

彼女たちにもこの五年間に、肩身の狭い思いをさせてしまった。

今まで夫婦の義務は果たしてきたが、妃としての最大の義務である子供を授かっていないのだから。

ジェラートは一体何を考えているのか。王位を継ぐ立場なのに、一向にシャルロットに触れようとはしない。

週に一度は一緒に寝るが、それはただ単に同じ空間にいるというだけ。

彼はシャルロットが眠るベッドの隣で書類仕事をし、仕事を終えたらソファで寝ていた。

今までは世継ぎに対する重圧もあつたけれど、その心配ももう必要ない。

なぜなら小説では、ヒロインの聖女とジェラートの間に子供が生まれるのだから。

シャルロットは国の心配はせずに、安心して離婚のことだけ考えれば良い。

そう割り切ると、今までの肩の荷がすっかり下りた気分になる。シャルロットも侍女たちと同様にうきうきしながら、引越作業を始めた。

その夜。いつもどおりにジェラートと無言の晚餐を終えたシャルロットは、意気揚々と食堂を出た。

すでに荷物を載せた馬車を邸宅へ向かわせており、シャルロットを乗せる予定の馬車も準備が整っているはず。

部屋へは戻らずにそのまま玄関へと向かっていたところ、なぜか後ろから誰かがついてくる足音が聞こえる。

いや、誰かなど考える必要もない。食堂を出てからずっとついてきているのだから、その足音

の主はジェラートに決まっている。

「王太子妃様。王太子殿下がついてきていらっしやいますか……」

小声でそう報告してくる侍女のアンに、小さくうなずいた。

「許可は得ているのよ、気にする必要はないわ。きつとジェラート様もこちらに用事があるのよ」

今まで夫婦の義務以外では、妻に関わりうとしなかった夫だ。シャルロットに対して用事があるとは思えない。そもそも用事があるなら、晚餐の際に伝えていたはず。

そう判断して振り向くことをしなかったが、ジェラートはそのまま無言で玄関までついてきてしまった。

さすがに、何も言わずに馬車へ乗り込むのは気が引ける。

おそるおそる、後ろを振り返ってみた。

「ジェラート様、なにか？」

「……本当に、行くのか」

「……えつ。それを確認するために、わざわざついてきたの？」

今までのジェラートらしからぬ言動に少し驚いたが、すぐに納得する。

昼間のジェラートは、言い捨てるようにして別居を許可したので、妻が本当に行動を起こすか確認をしにきたのだろう。

「ええ。今まで、お世話になりました。また明朝、お会いいたしましょう」

優雅に挨拶をおこなってから、身をひるがえして馬車へと乗り込む。

(お別れの挨拶をしただけで、他人になった気分になれるわ！)

思ってもみなかった効果に、シャルロットの心は羽が生えたように軽くなる。それはもう、とびきりの笑顔でジェラートに向けて手を振ってしまおうくらいに。

ジェラートは彫像のように動かなくなったが、シャルロットはさほど気にも留めなかった。夫がたびたび硬直するのは、癖のようなものだ。

馬車が動き出し、夫が見えなくなったのを確認すると、シャルロットは「ふふっ」と満足しながら微笑み、背もたれに背中を預けた。

「ご機嫌ですね、王太子妃様」

「アン。私は明日の朝まで王太子妃ではないのよ。名前で呼んでちょうだい」

「ふふ、失礼いたしました。シャルロットお嬢様」

侍女の中でアンだけは、結婚の際に伯爵家から連れてきたので、シャルロットとは旧知の仲。

アンの母はシャルロットの乳母でもあったので、彼女とは幼い頃から遊び相手として一緒に育った。

シャルロットの事情を最もよく理解しているアンは、心配そうにシャルロットを見つめる。

「本当にこれでよかったのですか？ お嬢様は、本当は王太子殿下のことを……」

「良いの。私の初恋は、実らずに終わったのよ」

小説の中のシャルロットが、聖女に嫉妬した気持ちはよくわかる。

シャルロットはジェラートに、恋をしていたのだから。

二人の出会いは、五年前。王宮で開かれた舞踏会だった。

初めて参加した舞踏会で、誘われるままに何人も男性とダンスを踊ったシャルロットは、慣れないヒールで靴擦れを起こした。

痛さに耐えながら廊下を歩いていた時、たまたま通りかかったのがジェラートだった。

『足を引き擦っているが、どうした？』

胸の辺りまで伸びた銀髪に、琥珀色の鋭い瞳。狼を思わせる風貌の男性だったが、不思議と怖くは感じなかった。

『お恥ずかしながら、靴擦れを起こしてしまいました……』

そう返すと彼は靴擦れを確認し、『これは辛そうだ』と、軽々とシャルロットを抱き上げてしまふ。

彼の逞しさと、優しさに、その時シャルロットはすっかり心奪われた。

その日は名前もわからないまま別れたが、後日。伯爵家へと王太子から結婚の打診が来た時は、心底驚いた。

女嫌いで、社交の場へも滅多に姿を現さなかった彼が、一度助けただけのシャルロットを見初めた。

シャルロットにとっては夢のような話で、反対する父をなんとか説得して婚約へと漕ぎつけた。

しかし再会した彼は、驚くほど冷たくて、ろくに目も合わせなければ、言葉も発しない。

自分が見初められたのは間違いだったのではと不安になり、父と一緒にそれを確認した。

ジェラートはただ一言、こう告げた。

『彼女で間違いない』と。

冷たい彼だが、彼自身が結婚を望んでいると知り、きつと淡泊な性格なのだろうと思うことにした。

彼の意向により、出会ってから三か月という早さで結婚式を挙げたことも、愛情表現の一つのよう嬉しかった。

貴族たちは、シャルロットが王太子と無理やり結婚させられたと見ているようだが、本人たちはお互いに望んで結婚した……はずだった。

けれど実際に結婚生活を始めて、淡々とこなすだけの夫婦の義務を果たすうちに、否が応でも気づいてしまう。

彼は私を愛していない。ジェラートにとって年若いシャルロットは、ちよ・うど良か・つただけなのだ。

結婚適齢期を迎えつつあり、なおかつ女嫌いの彼にとって、結婚相手選びは苦痛の種だったと聞く。

そんな彼の前にたまたま現れたシャルロットは、実に都合の良い娘だったのだろう。

この結論に至るまで、三年もの年月を費やした。その後は離婚を願ったが叶わず、時間ばかりが過ぎていった。その上、聖女が現れて夫を奪われる未来が待っている。

王太子妃としての責務だけを押しつけられたまま聖女とジェラートの幸せを見守り、ましてや断罪されるなどまっぴらごめん。

ジェラートのことはすっぱりと諦めて、新たな人生を歩んだほうがよい。

シャルロットは実家であるハット伯爵家の敷地へと入ると、懐かしさがこみ上げてきて、向かいに座っているアンと顔を見合わせた。アンも同じ気持ちで微笑む。

これまでは、夫婦の義務を優先しなければならなかったので、二人がハット伯爵家へ戻るのは五年ぶりだった。

広い庭の先に、五年前と変わらない姿で建っている邸宅の窓からは、温かみのある灯りが漏れている。

暗い時間の雰囲気そうさせるのか、長旅を終えてやっと家に到着したような、そんな安堵感が心に広がる。

「皆、ただいま！」

馬車を降りたシャルロットは、五年前と変わらない使用人の顔ぶれに嬉しくなりながら声をかける。皆、五年前よりも少しだけ年を取ったようだ。

「王太子妃様、ようこそおいでくださいました」

「もう、執事長つたら。家に帰ったのだから、昔のように呼んでちょうだい」

他人行儀に挨拶をする執事長に対してそう返すと、白髪交じりの彼はなぜか絶望したような顔で

震え出す。

「や……やはり、別居は事実なのでございますか？」

「ええ。そうよ？」

「おおう！　なんと、お可哀^{かわい}そうなシャルロットお嬢様！　冷え切った夫婦生活の末に、宮殿を追い出されるとは……！　この老いぼれ、お嬢様の代わりに恨みを晴らして参ります！」

なぜか、懐からテールナイフを取り出した執事長を目にしたシャルロットは、小説の記憶を思い出してハツとする。

（そうだった……。王太子と聖女を恨んだのは、私だけではなかったわ……）

伯爵家を侮辱したと判断したシャルロットの父をはじめ、母や弟、使用人たちまでもが、王太子や聖女に対して嫌がらせを仕込んだのだ。

彼らの嫌がらせは、シャルロットが王太子の気を引こうとしていたものよりも本格的だった。それを利用して王太子と聖女の暗殺を企てたのが、反王太子派の貴族たちだった。

元々は善良な貴族であるハット伯爵家は、反王太子派の計画にまんまとハマられた末に、シャルロットを含めた全員が断罪される。

つまりハット家の者たちの怒りを抑えなければ、同じ未来がやってくるかもしれない。

青ざめたシャルロットは慌てて、馬車に乗り込もうとしている執事長の前に立ちはだかる。

「誤解よ、執事長！　ジェラート様が追い出したのではないわ！」

「お嬢様！　この期に及んでまだ、あの冷血変態野郎の肩を持つのですか！」

「冷血、へ……へん……え？」

淑女がとても口にできるようなものではない誹^ひ謗^{ぼう}が飛び出し、シャルロットは混乱する。

冷血は理解できるが、ジェラートが変態行為を働いたことなど一度もない。

「お嬢様は、騙^{だま}されていらつしやるのです！　『伯爵領の宝石』と呼ばれたお嬢様を無理やり結婚させておきながら、愛情の欠片^{かけら}も見せず、かといって離婚も認めないのですよ。特殊な嗜好^{しこう}の持ち主に決まっております！」

「あの……、執事長の意見はよくわからないけれど……。この状況はむしろ喜ぶべきだわ」

執事長はたいぶ誤解しているようだが、ハット家において夫の評判がすこぶる悪いことだけは理解した。

なだめるように微笑むと、執事長は少し驚いたように眉を上げる。

「……と、おっしゃいますと？」

「私は、自分の意思で別居を申し出たのよ。これからさらに計画を立てて、必ず離婚してみせるわ。だから心配しないで」

「そのようなお考えが……！　この老いぼれ、お嬢様の足を引っ張るところでございました」

先ほどまでの怒りとは一転、成長した娘を見るように涙を浮かべる執事長。テールナイフを懐に戻すと代わりに、テールナイフを取り出して目元に当てている。執事長の懐には、テールナイフが一式入っているのだろうか。

伯爵家を出たのは十五歳の時だったので、守ってやらなければならないという意識が抜けていないのかも

しれない。

何はともあれ、とりあえず危険を回避できたので、シャルロットはほっと息を吐いた。

「理解してもらえて嬉しいわ。さあ、クラフティのところへ通してちょうだい。これから住まわせてもらうのも、ご挨拶しなければね」

現在の邸宅は、シャルロットの二歳下の弟であるクラフティが管理をしている。

アカデミーを卒業し成人を迎えたばかりの彼は、本来ならば跡取り息子として、父の補佐をしながら領地運営について学ぶ時期だが、頑なに領地へ戻ることを拒否している。

それはひとえに、姉が心配だから。

王太子妃であるにもかかわらず冷遇されている姉を、どうにか守ろうと王都に留まっているのだ。クラフティの部屋へ通されると、弟は長剣を腰に携え、伯爵家の紋章が入ったマントを羽織ったところだった。

「ちょっとクラフティ、こんな夜にどこへ行くつもりよ！」

「姉様、そこを通してください！ 僕は今日こそ、義理の愚兄との決着をつけなければなりません！」

(どうして、この家の者たちは皆、短気なのよぉ～！)

執事長とともに二人がかりで弟を押さえつけ、先ほどと同じく事情を説明したが、実の弟なので執事長とは熱量が違う。執事長の時よりも三倍ほど、説得に時間がかかってしまった。

クラフティが十三歳の時に、シャルロットが突然結婚したので、彼にとってジェラートは『大好

きな姉を奪った憎い男』のようだ。

「こほんつ。先ほどは取り乱してしまい、大変失礼いたしました。久しぶりに姉様とお会いできて嬉しいです」

落ち着きを取り戻したクラフティは、用意されたお茶を一口飲んでから、恥ずかしそうに微笑んだ。

シャルロットと同じく、ホワイトブロンドの髪の毛は緩やかに曲線を描いており、つづらな赤い瞳が可愛らしさを強調している。

シャルロットから見れば可愛い弟だが、他人から見ても可愛い男性の部類に入る。ちなみに彼は『伯爵領の天使』と呼ばれており、本人は大変不満のようだ。

「ふふ、先週の夜会で会ったばかりじゃないの」

「僕は一日たりとも、姉様と離れたくないのです。愚兄の愚行には殺意しか湧きませんが、姉様が伯爵家へ戻ってきてくれるのは大歓迎ですよ！」

天使の微笑で王太子批判をする弟に苦笑いする。

結婚して間もない頃は「私の愛する旦那様を侮辱しないで」と怒ったりもしたが、愛されていないと悟ってからは、反論するだけ自分が惨めになるので控えてきた。

しかし今は、賛同とまではいかないが、割と冷静に夫の批判を聞いていられる。

シャルロット自身、前世の記憶が蘇ったことで、ジェラートに対してがっかりしていたから。

ジェラートに愛されていないと悟ってからたびたび、離婚を切り出しはいたが、『女性嫌いの彼が、私を妃に選んでくれた』という事実が、妃を続けていられる支えとなっていた。

彼が生涯にわたり誰も愛さないのなら、シャルロットもいずれば割り切れるかもしれない。けれど小説の中の彼はただの男で、理想の女性に出会えば夢中になった。

断罪も恐ろしくはあったが、彼に対して抱いていた高潔さが崩れ去った。

彼にとつてシャルロットは、想像していたとおりに都合が良いだけの存在で、真実の愛が見つかるまでの繋ぎでしかなかったのだ。

「感謝するわ、クラフティ。それから——、このことはお父様とお母様には秘密にしておいてね」
両親のことだ。シャルロットが別居したことを知れば、クラフティと同じかそれ以上の反応を示すに決まっている。

下手に動かれたら、断罪の未来が待っている。

幸い両親は、王都を訪れることはあまりない。

ハット伯爵領は、国内でも有数の広大な狩猟場を有しており、秋には大規模な狩猟大会なども開かれ、貴族が娯楽で訪れる土地だ。

しかし今は聖女の力が弱まっているので、娯楽としての狩猟のほかに、魔獣や獣の駆除も頻繁におこなわなければならない。

クラフティが余計な手紙さえ書かなければ、両親に知られずにすむ。

真剣に願っていると、クラフティも慎重にうなずいた。

「敵をあざむくには、まず味方から。ですわね」

「別に、大層な作戦を立てるつもりはないわ。目標は、私と離婚しても良いと思えるほど、私が必要な存在だと悟らせることなの。クラフティは何もせずに、見守ってね」

「そうですか……。姉様がそうおっしゃるなら、ひとまず傍観することにします」

クラフティは作戦に参加できないのが残念だったのか、しょんぼりとうなずいた。

小説のストーリーが始まるのは一年後だが、ハット家が今この件に介入しても、良い結果が得られるとは思えない。弟には悪いが、自分だけでなくか頑張ろうと、シャルロットは改めて気を引き締めた。



シャルロットが久しぶりの自室にて、眠りについた頃。

ジェラートの侍従であるフランは、ジェラートがいつまで経っても執務室へ戻ってこないの、宮殿内を探し回っていた。

いつもは晚餐を終えたらすぐに執務室へ戻るのに、寄り道しているにしても遅すぎる。

もしかして王太子妃殿下とご一緒なのだろうかと一瞬だけ考えたが、「殿下に限って、それはないな……」とため息をついた。

何か急用で外出でもしたのかもしれない。玄関へ行ってみると、そこには一人で立ち尽くしてい

るジェラートの姿があった。

「殿下、こちらにいらしていたのですね。外出でもされていたのですか……殿下？」

話しかけても返事がない。

それどころか、じっと門の方角を見つめたまま。

フランは自分に気づいてもらおうと、ジェラートの顔の前で手を振る。王太子に対して失礼な態度ではあるが、フランはジェラートの幼馴染みでもあるので、雑な態度も許される仲だ。

その雑な振り向かせ方でやっと、ジェラートはフランに顔を向けた。

「……帰ってしまった」

「はい？ どなたかとお会いしていたのですか？」

「シャルが……」

「王太子妃殿下が？」

「別居したいと言って、帰ってしまった……実家に」

いつもは狼のごとく威圧感があり、貴族から恐れられている王太子が、今は捨てられた子犬のような顔をしている。

長年にわたり侍従を務めてきたフランでも、見たことがない表情。

さすがに見ていられないと思ったフランは、視線をそらすと声を殺して——笑った。

「笑うな、フラン」

「すみません。殿下とは思えぬ表情だったのです。ですが王太子妃殿下は、殿下のお気持ちを無

視して行動を起こすようなお方ではございませんよ。殿下が許可なされたのでは？」

「許可した……」

ジェラートが消え入りそうな声で吹き、今にも「くう〜ん……」と鳴きそうな顔をするので、笑いをこらえて「ごほんっ」と咳ばらいをする。

「そのように悲しまれるのであれば、引き留めればよかったでしょうに」

「夫婦の義務や公務は今までどおり果たすと言われて、反対する理由が思い浮かばなかった」

「理由でしたら、殿下のお気持ちを素直に伝えるだけで充分なはずですよ」

シャルロットがこのような事態になったのは、全てジェラートの責任だ。

もつと妻を受け入れ夫婦関係を深めれば、別居にはなっていなかった。

それはフランが指摘するまでもなく、本人が一番自覚しているはず。そう思ったが、当の本人は狼のような目つきに戻ってフランを睨みつける。

「俺の気持ちをシャルに伝える？ 無理に決まっている。俺はシャルの顔を見ただけで、頭の中が真っ白になってしまった。声を聞けば鳥肌が立つし、手に触れようものなら、全身が震え出してしまう」

「えっと、それは……誉め言葉なんですよね？ 凶悪な魔獣に出合った時の経験談ではありませんよね？」

「当たり前だろう。俺の女神を侮辱する気が？ いくら貴様でも、許さん」

狼が獲物を狙う時のような目つきになったジェラートは、腰に帯びている剣の柄を握りしめる。

「誤解ですから、剣は抜かないでくださいよ。それより『俺の女神』と誤解していることだけでも、ご本人に伝えてみたらいかがでしょうか。きつと喜ばれますよ」

そうジェラートに提案すると今度は、軽蔑の目を向けられる。

「お前は馬鹿なのか？　ろくに話をしたこともない男から『俺の女神だ』と言われても、気持ち悪いだけだろう。しかも俺は八歳も年上なんだぞ。犯罪者だと思われかねない」

「ろくに話したことがないって……。結婚して五年も経ちますのに、ご自分で言っていて悲しくならないんですか？」

ジェラートは再び、捨てられた子犬に戻る。

今日の主人は完全に壊れているようだ。

「出会ったばかりの頃でしたら、その可能性は無きにしても非ずでしたが、王太子妃殿下も二十歳になられましたし、お互いにいい大人ではありませんか」

「シャルは年々美しさが増しているというのに、俺は下り坂に差しかかっている。俺など、女神には不釣り合いなんだ……」

面倒くさい。

フランの頭に、でかかどその言葉が浮かんだが、それはなんとか消し去る。

ジェラートを手助けするのがフランの職務ではあるが、仕事の枠を超えて気にかけてくなる。

貴族の中には、威圧的な雰囲気ジェラートを王太子の座から引きずり下ろしたいと考える派閥もあるが、ジェラートにはどこか憎めない部分があるからこそ、フランはずっと仕えてきた。

「それほど年の差を気にしておられるのですしたら、なぜ王太子妃殿下と結婚なさろうと思ったのですか？」

今まで気にはなっていたが、普段のジェラートは夫婦の事情をあまり話さない。

今日はなぜか、饒舌に事情を話しているが、それだけ別居が衝撃的だったのだろう。今なら、二人の関係を改善する糸口が見つかるかもしれない。

「……俺を恐れない娘は、初めてだったんだ」

そう呟いたジェラートは、昔を懐かしむような表情で話し出した。

あの日ジェラートは、王妃から舞踏会への出席を迫られて、むしゃくしゃしていた。

二十三歳になり、結婚適齢期を迎えつつあるジェラートに対して、王妃の焦りも頂点に達していた。事あるごとに息子を社交場へ出させようと躍起になっていて、うんざりしていた時期だった。

ジェラート自身も、王太子としての責務は果たすつもりでいたが、令嬢たちのほうが自分の風貌を怖がって受け入れない。自分を恐れない娘がいるのなら、今すぐ連れてきてほしいくらいだった。

あの日も、それでむしゃくしゃしながら廊下を歩いていたらところへ偶然、出会ったのがシャルロットだった。

いつもなら無視して通り過ぎていたが、その時に限って意地の悪い考えが浮かび、足を止めた。

自分が話しかければ、この令嬢も怯えながら逃げるだろう。憂さ晴らしにちょうど良い。

しかし声をかけてみると、シャルロットは照れ笑いしながら、靴擦れを起こしたのだと打ち明

けた。

狼のようだと恐れられるこの容姿に驚いたり怯えるでもなく、笑顔を向けてくる女性は初めてだった。

一瞬にして心を奪われたジェラートは、彼女を馬車まで送り届け、馬車の家紋からハット伯爵家の娘であると突き止めた。

しかし、ジェラートはかなり浮かれていたので、確認するのを忘れていたのだ。彼女の年齢を。

「シャルがまさか、十五歳だとは思わなかったんだ……」

「確かに王太子妃殿下は、十五歳にして絶世の美女でしたからね」

年齢に気がついたのは、婚約の契約書にサインをした後。

この国の成人は十八歳だが、結婚に年齢制限はない。それがかえって、ジェラートを悩ませた。

シャルロットを優先するならば、結婚は彼女が成人してからのほうが良いが、三年後にはジェラートは二十六歳になる。

悠長に三年も待った後で、完全に結婚適齢期を過ぎた男との結婚は嫌だと、婚約破棄されたら立ち直れそうにない。

そして王妃は、適齢期が過ぎる前に息子を結婚させたがっている。

結局、伯爵令嬢が未成年なことよりも、王太子の事情が優先されて、出会いから三か月という早さでの結婚となった。

「だが、俺は誓ったんだ。シャルが成人するまでは、清いままでいようと」

「王太子妃殿下はもう二十歳ですよ。なぜ今でも、他人同然の関係なんですか？」

「それが誤算だった……。シャルは俺の予想をはるかに超えて年々、美しさが増していく。そしてどういうわけかより一層、俺好みの女性になっていくんだ……。もう、俺ごときが触れてはならない域に達している」

それには心当たりがあるフランは顔を歪めた。

シャルロットが宮殿に住み始めて間もない頃、「ジェラート様のお好みを教えてください」と相談を受けたことがある。

その際に、シャルロットがジェラートを慕っていると知ったフランは、二人の仲が深まればとの配慮で、ジェラートが好みそうな女性の髪形や服装、仕草などを教えたのだが……

まさか、逆効果だったとは。

頭を抱えたい気持ちを抑えながら、フランは微笑む。

「事情は概ね把握いたしました。まずは別居の撤廃よりも先に、殿下が王太子妃殿下に慣れることから、始められたほうが良さそうですね」

「俺にできるだろうか……」

「弱音を吐くなど、殿下らしくありませんよ。僕もお手伝いしますから、執務室へ戻って作戦会議でも開きましょう」

懐中時計を確認してみると、すでに日付が変わっている。さっさと方針を決めて解散しなければ明日の職務に支障をきたす。

ジェラートを執務室へ誘導しようとしたが、彼は動こうとせずに門の方角へと視線を戻す。

「俺はここにいる」

「……はい？」

「明日の朝。シャルが本当に戻ってくるまでは、心配でここを離れられない」
駄々^{だだ}つ子か！ と心の中で叫んだフランだが、それからすぐ微笑む。

この状況の原因の一端は自分にあるのだから、とことん付き合うしかない。

「かしまりました。すぐにでも、椅子と毛布をご用意いたしますね」

「ああ。朝まで時間がない。テーブルと、資料も頼む」

第二章 夫の様子がおかしい

翌朝、いつもより早く起きたシャルロットは、アンと一緒に今日の服装についての案を出し合っていた。

宮殿の生活では侍女が五人もいたので、彼女らがいつも完璧に身支度を整えてくれたが、伯爵家へ連れてきたのはアンだけ。

王太子妃の身だしなみに問題があると難癖をつけられて、別居が白紙に戻っては元も子もない。念入りに身支度を整えなければならない。

「本日は春らしく、淡い緑のドレスなどいかがでしょうか」

「良いわね。今日は暖かくなりそうだから、髪は束ねてサイドに流そうかしら」
ジェラートは、可愛い服装を好まないそうだが、なんでも、そういった服装の女性は特にジェラートを怖がる傾向にあるらしく、苦手意識があるのだとか。

服装だけで人の性格を判断するのは難しいが、若い子が特にジェラートを怖がっているのだろう。そんな事情をフランから教わって以来、シャルロットは可愛い装飾のドレスは卒業した。リボンは極力使わず、フリルよりもレース、明るい色よりも落ち着いた色合い。

元々大人びた顔立ちではあったが服装の変化も相まって、八歳の年の差を感じさせないほどの見

た目を手に入れることができた。

(そんな努力も、無駄だったのだけれど)

無駄と知りつつも、未だにそれを続けている。離婚はしたいが、『ジェラートに良く見られたい』という願望はなかなか消えてくれない。

矛盾した考えに苦笑しつつも、今日も完璧に身支度を整えた。

シャルロットとアンを乗せた馬車は、王宮の門を通り抜け、王太子夫妻が住まう王太子宮へと到着した。

今日は別居してからの宮殿訪問、初日。

職場に出勤したような、新しい気持ちで馬車を降りようとしたが、馬車の扉が開かれて目に飛び込んできたのは、御者ではなく、正面玄関を守っている騎士でもなかった。

「早かったな」

「……おはようございます、ジェラート様。朝食に遅れてはいけないと思ひまして、早めに参りました」

掴まれとばかりに腕を差し出されたのでシャルロットは驚きつつも、ジェラートの腕に手を添えながら、馬車を降りる。

(どうしたのかしら、ジェラート様……)

今までシャルロットが外出しても、出迎えられた経験など一度もない。

不思議に感じつつも夫を改めて見たシャルロットは、さらに驚いた。

なぜか服装は昨日と同じままで、彼の表情には明らかに疲れの色が窺える。

(寝ていないのかしら……)

ジェラートは何も言わないまま宮殿の中へと足を向けたので、シャルロットも後に続いた。

玄関へ入るとなぜか、テーブルと椅子が設置されている。

テーブルの上にはティーセットやら、会議でもしていたかのような紙の束。椅子の背もたれには毛布がかけられている。

玄関を守っている騎士たちが使ったのかと考えたが、玄関の横には彼ら専用の詰め所が設けられていた。

騎士ではないとするならば、玄関でこのようなことをできる人物はたった一人。着替えもせずに、やつれた表情の彼しか思い当たらない。

「あの……、ジェラート様……」

わざわざ、玄関で会議をしなければならない理由はなんだろう。何か緊急事態でも起きたのだろうか。先を歩く夫に声をかけてみたが、彼は歩みを止めてはくれず、振り向いてもくれない。

それは夫のいつもどおりの態度ではあるが、シャルロットの気持ちは沈んでしまう。夫婦なのだから緊急事態が起きた時くらいは、話してくれてもよいではないか。

自然とシャルロットは歩く速度が遅くなり、ジェラートとの間に距離が生まれる。

「……くても良い」

いつもならそのまま置いていかれるが、ジェラートは立ち止まって何かを呟いた。

「……え？」

シャルロットに振り向きかけたジェラートは、途中でぴたりと止まり廊下の絵画を見つめる。

「朝食は急がなくて良い。明日からはもっと遅く来い」

「はい……、承知いたしましたわ」

（私を気遣ってくれたのかしら……）

シャルロットの心には一瞬だけそんな期待が浮かんだが、それはすぐに勘違いだと納得する。

「着替えてくる」と、足早にその場を去った夫を見て、週に一度だけ一緒に寝る日のことを思い出したのだ。

彼はいつも、シャルロットが寝た後も書類仕事をして、そのままソファで寝てしまうような人だ。シャルロットが知らなかっただけで、徹夜の会議も珍しいことではないのかもしれない。

先ほどは出迎えてくれたのかと思っただけ、早く到着したことで彼の邪魔をってしまったようだ。

別居は自分の都合で始めたこと。なるべく夫に負担をかけないようにしなければ。

けれど翌日。前日より遅く来てみたが、またも夫に出迎えられた。

まだ早すぎたようなので、今日はさらに遅く来てみたというのに、またしてもジェラートに出迎えられてしまう。

さすがに自分が早く到着しすぎて、迷惑をかけているのではないと気づいた。

ならばジェラートはなぜ、毎日徹夜をして、しかも玄関で会議をしているのか。

「皆、私を実家に帰っている間に、事件は起きていないかしら？」

朝食を終えて自室へと戻ったシャルロットは、宮殿に残している侍女たちに尋ねてみた。

「事件でございますか？ 平穏な夜を過ごしておりますが……」

侍女たちは、顔を見合わせて首を傾げている。

どうやらこの宮殿で、何か問題が起こっているわけではないようだ。

「王太子妃様、何か心配事でもございますか？」

「生活環境が変わったことで、見えていなかったことが見えただけかもしれないけれど。ジェラート様の様子がおかしいような気がするのよね……」

侍女が入れたお茶を飲みながらシャルロットは、この三日間の出来事を思い返してみた。

ジェラートは徹夜した様子で毎朝出迎えてくれるが、異変はそれだけではない。

伯爵家と宮殿を往復する際の護衛騎士が日に日に増えているし、伯爵家の敷地にも、なぜかジェラート直属の近衛が派遣されてきた。

この国は、王太子妃が夜に実家へ帰っても問題ないほど治安が良いのに、この警備の厚さは正直に言って異常。

やっばり何か、事件が起こっているに違いない。

弟のクラフティもそう判断したので現在、伯爵家は厳戒態勢が敷かれている。猫一匹たりとも、伯爵家の敷地に入るのは難しい。

「あなた方も、少し調べてくれないかしら。状況次第では、私も宮殿での生活に戻らなければならぬわ」

「かしこまりました、王太子妃様！」

(これで少しは、状況が掴めるとよいのだけれど……)

調査を侍女に任せたシャルロットは、聖女が住まう聖女宮からの書類に目を通した。

現在の聖女マドレーヌは、先々代国王の正妃。先々代国王はすでに崩御しているが、マドレーヌは八十三歳となった今でも健在だ。

王宮の敷地内の最も北にひっそりと建てられた小さな宮殿、聖女宮に住んでいる。

マドレーヌは毎日のように北の山脈があるほうを眺め、山脈の麓にある故郷に『帰りたい』と願いながら、日々を過ごしていた。

そんな聖女の宮殿の管理を今は、シャルロットが任されている。

「マドレーヌ様は、健診の結果も問題なかったようね。この様子なら、誕生祭は予定どおりに開催できそうだわ」

「本宮のほうでも、準備が着々と進んでいるようですわ」

もうすぐマドレーヌの、八十四歳の誕生日がやってくる。

この国では聖女の誕生日を『聖女誕生祭』として大々的に祝う。国中でお祭りが開かれ、その日は祝日となる。

七十歳の誕生日までは、聖女によるパレードなどもおこなわれていた。今はマドレーヌの体調を重視して、本人が出席する行事は王宮内での宴のみとなっている。

その準備も滞りなく進んでいるようだが、侍女たちは気遣うような視線をシャルロットに向けてきた。

自分の侍女たちにそんな顔をさせてしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「ごめんなさい。今年もあなたたちには、肩身の狭い思いをさせてしまったわね」

「とんでもないことでございます！ 私たちは王太子妃様の補佐をするのが仕事ですもの。——ただ、王太子妃様のお気持ちを考えますと……」

聖女誕生祭の準備に関わるのは大変な名誉であり、本来ならば主催する王妃に補佐として呼ばれるはずだが、シャルロットはこれまで一度も準備に呼ばれたことがない。

傍から見ると、王妃との間に軋轢があるようにしか見えない。だが実際は、王妃の過剰な配慮によるものだった。

王妃は、ジェラートがなかなか結婚しないことに業を煮やしていたが、息子がやっと結婚したかと思えば、今度は世継ぎが生まれぬ。

その理由をシャルロットに押し付けるほど、王妃は愚かな人物ではなかった。

『不甲斐ない息子で申し訳ない』とシャルロットに謝り、『負担はかけないから、どうか離婚しな

いで』と配慮の言葉をかけてくれる。

しかしその優しさが過剰なあまり、シャルロットは王太子妃としての役目を少ししか与えてもらえず、冷遇されているように見えるのだ。

聖女宮の管理は、シャルロットが願ひ出てやつと得た仕事だった。

「私は、王妃様のご好意を素直に受け取るわ。衆をできるうちは、させてもらいましょう」

どのみち、シャルロットは離婚を望んでいる。今さら必死になる必要もない。一年以内には、侍女たちもこの環境から解放してあげられるはずだ。

その夜。晚餐終了後にシャルロットは、帰宅するために玄関へ向かったが、今日もジェラートは後ろをついてくる。

『ついてくる』という表現が合っているかは少し疑問でもあるが、とにかく夫とともに玄関へと向かうのは、今日で四日目。

玄関の脇では今日も、フランや補佐官たちが会議をするための準備をしている。シャルロットを護衛する騎士も待機しており、物々しい雰囲気だ。

（今夜は護衛が十名もいるわ……）

本当に何か、危険が迫っているのだろうか。このような状況で自分の事情を押し通すのが申し訳なく感じてくる。直接、事情を聞いてみようかと、後ろにいるジェラートを振り返った。

一瞬だけ目が合ったが、すぐにそらされる。それはいつものことなので、構わず事情を尋ねよう

としたが、先に口を開いたのはジェラートだった。

「気をつ……………」

「え？」

「気を……………ル領の状況はどうなっている？」

突然、ジェラートは大股でフランの元へと向かう。シャルロットに用事があったわけではなかったようだ。

（キオール領は国境に接する領地よ。そこでの問題をわざわざ、玄関で話し合っているの？）

ますます事情がわからなくなってきたが、騎士に馬車へ乗るよう促されたので、今日のところは帰ったほうが良さそうだ。

「お気をつけて、お帰りくださいませ。王太子妃様」

「皆も、ゆっくり休んでね」

宮殿に残す侍女たちも、今の発言は聞いたはず。明日にでもキオール領について調べてもらおうと思いつつ、シャルロットは馬車へと乗り込んだ。

翌日。シャルロットは聖女宮を訪れた。

王宮の大庭園の奥にひっそりと佇むこの宮殿は、シャルロットとジェラートが住む宮殿よりもこぢんまりしている。

ここは、王宮の豪華な暮らしに慣れなかった現聖女マドレーヌのため、先々代の国王が建てたと
いわれている。

マドレーヌが王妃だった頃には、公務の合間に訪れる安らぎの空間として。王位が息子に継承さ
れてからは、先々代国王とともにこの宮殿へと移り住んだ。

「指示どおりに仕上げてくれて感謝するわ、侍女長。ミモザをイメージしたのは正解だったわね。
春らしい柔らかな雰囲気になったわ」

宮殿に到着したシャルロットは、模様替えされた箇所を見て回っていた。

季節ごとの模様替えを考えるのも、シャルロットの仕事の一つ。マドレーヌは都会的なものより
も、自然を感じられるようなものが好きなので、いつも植物をイメージした空間づくりを心がけて
いる。

今回は春らしく、黄色い綿毛のような花ミモザをイメージしてみた。こだわったポイントはタッ
セルやフリンジ。基本形ではなくポンポン丸い黄色の綿毛のようにして、布製品のさまざまな箇所
にアクセントとして付けられている。

「恐れ入ります、王太子妃殿下。聖女様も大変、お喜びになられておりました」

真つ白な髪をきつちりと結い上げている侍女長も、この仕上がりには満足していた。

侍女長は長年にわたり聖女に仕えていて、七十歳を超えている。シャルロットが宮殿の管理をす
るようになってからは、娘時代に戻ったかのように、一緒になって模様替えを楽しんでいる。

シャルロットが聖女宮へ出入りするようになってからは、ふさぎ込みがちだったマドレーヌも朗

らかな雰囲気に戻ってきたと、シャルロットの存在にいつも感謝していた。

シャルロットにはこれからも宮殿の管理をお願いしたいが、ここ数日で出回り始めた『別居』の
噂うわさを侍女長は気にしていた。

しかしマドレーヌの侍女が、王太子夫婦の問題に口を挟むわけにもいかない。

「聖女様も、王太子妃様のご訪問を心待ちにしておられました。是非とも、お会いくださいませ」
侍女長ができる引き留めは、これしかなかった。

「マドレーヌ様が？ 私もこの前のお礼をお伝えしたかったの。お会いするわ」

貴族社会に慣れなかったマドレーヌは、人にはあまり会いたがらない。シャルロットも聖女宮へ
は頻繁に訪れているが、呼ばれた時にしか会わないようにしている。

マドレーヌとは五日前に会ったばかりなので、珍しいこともあるものだと思いきや、彼女の
部屋へと向かった。

「ごきげんよう、マドレーヌ様。シャルロットが参りました」

「あら、シャルちゃん。よく来てくれたわね」

マドレーヌの部屋へ入ると、ふわっと暖かい空気に包まれる。正面の暖炉には赤々と薪まきがくべら
れており、マドレーヌは暖炉の手前で揺り椅子に腰かけて、編み物をしていたようだ。

王太子宮ではこの時期になると、朝晩しか暖炉を使っていないが、高齢のマドレーヌはまだ昼間
も暖炉がないと寒いらしい。

「こちらへ、いらつしやいな」

「はー」

マドレーヌに手招きされたシャルロットは、彼女の元へ向かい、暖炉だんろの前に敷かれている絨毯じゅうたんの上に座った。

「いつも床に座らせて、ごめんさいね」

「構いせんわ。領地の別荘にいるような気分ですもの」

この部屋は簡素なベッドと、マドレーヌが座っている揺り椅子、その隣に小さなテーブル、そして聖女として祈りを捧げるための祭壇しかない。

先々代王妃の部屋とは思えない質素さだが、これはマドレーヌ自身が望み、先々代国王がわざわざ作った部屋だという。

マドレーヌが生まれ育った家を横して、山小屋のような雰囲気となっている。

シャルロットはこの部屋を訪れるたびに、領地の狩猟小屋を思い出す。ハット伯爵領は狩猟場として有名なので、シャルロットも弓が得意。結婚する前は父や弟と一緒に、狩猟小屋に何日も滞在した経験があった。

普通の貴族女性なら、この部屋にはあまり来たがらないだろうが、シャルロットにとっては慣れ親しんだ居心地の良い場所でもある。

「マドレーヌ様。先日は素敵な贈り物をありがとうございました」

前回の訪問時にシャルロットは、マドレーヌから贈り物を受け取っていた。

聖女マドレーヌの誕生祭が近づくにつれて、各国からは祝いの品が届いている。南の王国からは宴用にと、食器が献上されていた。

その食器は巨大虹色二枚貝という、滅多にお目にかかれない魔貝から作られたもの。

本来なら、魔法具の材料として高額取引される素材だが、聖女のため特別に食器として加工された。

他国が貴重な品を献上するには理由があり、聖女の『土地を浄化する能力』が、この国だけではなく大陸全体に作用しているから。聖女は、大陸全体の『宝』なのだ。

その献上された食器の中にボンボン菓子用の器、ボンボニールがあり、マドレーヌはそれを贈ってくれた。

ボンボニールの中には、しっかりとボンボンが入っていて、まるで本当の曾孫ひまごとしてマドレーヌに甘やかされているような気がして、嬉しく感じていた。

「ふふ。ボンボンは美味しかったかしら？」

「はい。少し食べすぎてしまい、フラフラしてしまいました……」

就寝前だったので少しだけにするつもりだったが、止まらない美味しさだったので一人で全部食べてしまった。食べきってから、ウイスキーのアルコール度数が高かったのだと気がついたのだ。

そのせいか、思いのほか熟睡してしまつたらしく、盛大にベッドから落ちて前世の記憶が戻ったのは、ボンボンのおかげと言っても過言ではない。

「シャルちゃん、お酒に弱かったのね。ジェラートに教えてあげようかしら」

立ち読みサンプル
はここまで

「ええっ!? そんな……、恥ずかしいですわ!」

ジェラートと一緒にのお酒は控えていたので、知られてしまうのは恥ずかしい。

顔の熱を感じながら、言わないでほしいとお願ひしていると、マドレーヌは安心したように微笑む。

「その様子だと、ジェラートを嫌いになったわけではなさそうね」

その発言が、何を意味しているのか察したシャルロットは、言葉を詰まらせる。

どうやら、マドレーヌが意地の悪い発言をしたのは、シャルロットの気持ちを確かめるためだったようだ。

「……別居の件を、ご存知でしたのね」

「こんな隠居暮らしだけでも、王家に関する情報は自然と集まってくるのよ」

寂しそうな表情になったマドレーヌを見て、シャルロットは王家へ嫁いで間もない頃を思い出して心が痛んだ。

あの頃のマドレーヌは、『故郷へ帰りたい』という感情しかないのではと心配になるほどふさぎ込んでいた。

挨拶をするために初めてこの部屋を訪れた際も、マドレーヌはシャルロットと目も合わせずに、窓の外を見つめるばかり。

大陸中から慕われる聖女がこのような状態であることに、大いに衝撃を受けた。

それからシャルロットは、頻繁に聖女宮を訪れるようになった。マドレーヌの心を少しでも楽に

して差し上げたいとの気持ちもあったが、ジェラートとの結婚生活が上手^{うま}くいかず、寂しい気持ちを抱えていたというのもあった。

最初はマドレーヌも、シャルロットの存在をあまり快く思っていなかったようだが、五回目の訪問時に、『ハット伯爵領がマドレーヌの故郷の隣』だと告げたことで、やっとマドレーヌはシャルロットに興味を持ち始める。

それからは同じ北の地方出身ということで、マドレーヌはシャルロットに心を開くようになり、シャルロットが宮殿を管理し始めると、別人のようにマドレーヌは明るくなっていった。

しかしシャルロットが別居したことで、その明るさが消えてしまうのではと不安に駆られる。

「マドレーヌ様……。別居はしましたが、王太子妃としての務めは果たすつもりです。聖女宮の管理も、これまでどおり務めさせていただきますわ」

一年後には後任の聖女が見つかり、マドレーヌは故郷へ帰ることができる。それを見届けてから離婚を願ひ出れば、マドレーヌに迷惑をかけずにすむはずだ。

そう考えていると、マドレーヌが手を伸ばしてきたのでその手を取った。シワシワだけれど、温かい手だ。

「私のことなら心配しないで。予感がするのよ」

「予感……ですか?」

「もうすぐ『新しい聖女』が見つかる気がするの。私はついに、故郷へ帰れるのよ」

長年の夢が叶う喜びを囁^{ささ}みしめるように、マドレーヌは微笑む。